恋を数えて

koi o kazoete

佐藤正午

sato shogo

講談社

H35920

著者略歴

佐藤正午（さとうしょうご）　昭和30年佐世保市に生まれる。北海道大学文学部中退。昭和59年、すばる文学賞を受賞した『永遠の1』がベストセラー（集英社文庫所収）となり、恋愛小説の新しい書き手として一挙に注目される。

著書は他に、『王様の結婚』『リボルバー』（いずれも集英社刊）、『ビコーズ』（光文社刊）がある。

恋（こい）を数（かぞ）えて

昭和62年2月25日　第1刷発行

著　者　佐藤正午

発行者　野間惟道

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号一一二

電話東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　藤沢製本株式会社

定　価　一二〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Shogo Sato 1987 Printed in Japan

ISBN4-06-202953-7 (0)（文1）

数へうた

堀口大學

うそを数へて
ほんまどす

めくらを数へて
あんまどす

ととを数へて
さんまどす

とんぼを数へて
やんまどす

まぬけを数へて
とんまどす

くとうを数へて
コンマどす

したを数へて
エンマどす

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

恋を数えて

書下ろし長篇小説

装幀　菊地信義

1

賭け事をする男とだけは一緒になるな。

それが母の遺言でした。遺言といっても、いまわのきわの枕もとで聞かされたわけではないし、そのことばを書きつけたものがのこっているのでもありません。母は仕事から帰った夕方、服を着替えるひまもなくいきなり茶の間でたおれ、救急車で病院へ運ばれて三日後に意識の戻らないまま死んだ。七年まえのことです。わたしが二十三歳になったばかりの冬だった。脳動脈瘤破裂というのが死因だと、あとで医者にいわれました。

母は生命保険の勧誘の仕事を二十年ちかくつづけていました。兄もわたしもそのおかげで高校へ通い、卒業できたといってもいいすぎではありません。父の収入をあてにしてい

たら、わたしたち兄妹は中学へだってまともに行けなかったにちがいない。父の仕事は定まっていなかったのです。最初は、郵便局の窓口にすわっていたと母から聞いたことがあります。まだ二十代の前半だった彼と彼女が知りあったころ。いったいどんな顔をして父が郵便局の窓口で事務をとっていたのか、その話をむかし母の問わず語りで教えられたときもいまでも、わたしには想像もつきません。やがてふたりは恋におち、母は兄を身ごもりました。式も披露宴もない、ただ戸籍上の結婚でした。そのとき父はすでに安定した職場を去り、友人と共同で事業をはじめていたのです。運送業というだけで具体的にはなにも聞いていませんが、それも一年ともたなかったらしい。とうぜん若夫婦には払いきれない借金が残る。父と母はそれぞれの親戚を駆けまわり、お金は集まったが信頼はくずれました。その後も似たような出来事が重なるたびに、ふたりはすこしずつ孤立し、疎んじられるようになるのです。麻雀屋、喫茶店、タクシーの運転手、父は職業をてんてんと変えました。つてを頼って小さい旅館をまかされていたこともあります。キャバレーの支配人だったときもある。他にもあげれば数えきれないでしょう。わたしはただ、十代のころ学校から求められた調査表に父親の職業という欄があって、そこへ母が書きこんだ（書きこ

むたびにちがっていた）幾つかを記憶しているにすぎないのです。

父はしだいに疲れていったのだと思います。それとも、自分じしんに諦めをつけていったのだと思います。運に見はなされた男、というのが兄の、わたしの前でいちどだけ父親について口にした短い批評です。そして、ついてない、という呟きは妻が死んだあとの、五十男が手酌で酒をのむときの口癖でもあった。たしかに父は運に見はなされていたのでしょう。やることなすことのことごとくに失敗を重ね、けりをつけたつもりで他人に紹介された職場に勤めても、どうしても成功という見果てぬ夢を追って腰がおちつかない。いってみれば父の二十代以降の人生はそのくりかえしだった。おまけに頼りにしていた女房には先だたれてしまう。それを不運の一言でかたづけたいというのなら、かまいません。父が自分で選んだ生き方だから（あるいは死に方だから）、わたしはとやかくいうことはしない。実際にはのこせなかったけれど彼の架空の墓に、不運だった、と碑銘を刻んではなむけにしてやることもできる。けれど、母はどうなるのか。父は男としての一生を不運と嘆けばそれでたりるけれど、運のない夫に連れ添った女のほうはどうなるのか。

そのことをむしろ兄に訊ねたい気がする。兄は母親の一生をどう評するのか。夫の収入

をあてにできず自分の力で子供二人を育てあげ、それでもなお家計のために働くことをやめず、しょっちゅう家をあけたままでふらりと帰ってきては金をせびる男と離婚もしないで、あげくに脳動脈瘤破裂というとつぜんの想像もつかない死因で五十年の生涯を閉じた女。そういう女をどんな短いことばで表わせばよいのか。不運とか、ついてないとか、そんな文句でかたづけることはできない。母は、自分を運のない人間だとは決して嘆かなかった。

わたしは母が死んだ日の午後を忘れたことはありません。窓のそとには汚れた綿のような雲が厚くひろがっていて、集中治療室のなかは朝から人工の光が必要でした。四台あるベッドのうちの、窓際に横たわり眼を閉じた母の顔は、冬の陽にあたためられることはなく、蛍光灯に白く照らされてまるで蠟のように見えた。わたしは蠟人形の眼尻に刻みこまれた皺を数えていた。それは左右対称ではなくて、右のほうがより細かく精巧で、左眼のわきには一本の深く鋭い切れこみが際だち、薄い網目になったまわりの皮がもりあがっている。おそらく閉じた眼は二度とうごかないだろう。右眼の細かい曲線の流れや交叉も、左眼の深い溝もずっとそこに刻まれたままだろう。わたしはベッドのそばの椅子のうえで

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

身じろぎし、涙をこらえるために顎をそらせた。髪の毛を肩のうしろへ払った。そのとき看護婦が駆け寄ってきて、母の頭の近くに置かれた機械を幾つか操作し、わたしに離れるよう指図しました。まもなく担当の医者が現われ、数が増えた看護婦の一人に様子を訊ねながら、肩越しに、付き添いの家族はあなた一人だけかといった。

「父が……」

「呼んできなさい」

医者はそう、看護婦にともわたしにともつかず命じます。しかしどちらにもその暇はありませんでした。すでに医者は母の、青白い細い手首を握っていた。看護婦の声が、事務口調で時刻をつぶやき、母の手は下へ戻されました。

急ぎませんでした。泣いてもいませんでした。集中治療室の扉を開け、空気の冷んやりした廊下に立つと、一度だけゆるく長い息を吐き、吸いました。それから待合所の方へ向ってのろのろと歩いていった。うつむかずに、眼を開いて歩いていったおかげで父の姿はすぐに見つかりました。父はこちらへ背を向ける恰好で電話をかけていました。そばへ近寄るまでわたしのスリッパの音に気がつきませんでした。しかし声をかけるまえに、煉瓦

いろのジャケットと白いタートル・ネックのセーターを着こんだ男は振り返った。色の浅黒い、無精髭には白毛もまじった、眼だけが少年のように優しい二重をした顔です。受話器を片手でふさいで、口を小さく開いたまましばらく娘を見守り、やがて、

「……だめか？」

と訊ねました。

ふたたび息をゆるく長く吐き、吸って、なにも答えなかった。父は電話の相手ともう一言二言しゃべり、受話器を置いてからゆっくりうなずくと、

「そうか」

と呟きます。わたしは押さえた声でいいました。

「こんなときにまで」

「……？」

「なにも病院でしなくても、いいでしょう」

父はわたしと同じ方向へ眼をやって、ピンクいろの電話を一瞥すると、

「時間がなかったんだ。ここを離れるわけにはいかんだろ」

と答えました。それを聞いて喉が詰まった。
「いちばん大事なことなの？　母さんが……こんなときに競輪で勝ったか負けたかということがそんなに大事なことなの？」
「よせ」と父が不機嫌にさえぎりました。「いまそんなことをいわんでもいい」
「いまだからいうのよ。母さんが言えないからかわりにいうんだわ。あのひとは一度もそんなことをいわなかったけれど、あたしは……」
しかし最後まで聞かずに、そばを通りすぎようとします。腕をつかもうとして、邪険に払いのけられ、
「広幸にはやく連絡をとれ」
言い捨てると、死んだ母の病室へ向ってスリッパを鳴らしながら歩いていきました。
そのとき父の後姿を見ながらわたしはあの母のことばを思い出していたのです。賭け事をする男とだけは一緒になるものじゃない。しかしそれは自分の夫に対する愚痴として口にされたものではなくて、たとえば最初はわたしが十九の年、高校時代からずっと交際のつづいていた男ともだちを家へつれていったとき、母は冷たい麦茶と……そう、夏だっ

た、彼は東京の大学から休暇で帰省していました……西瓜でもてなしてくれて、その夜おそく、父も兄もいないふたりきりの茶の間で、湯あがりの髪を扇風機にあてているとふいに母がつぶやいたのだった。

「高野さんは……」

高野昭というのが初めての相手の名前でした。わたしはバスタオルを濡れた髪にあてたまま振り返った。母は卓袱台のうえに置いたコップ一杯のビール（それだけしか飲めない）を両手でいじりながら、

「高野さんは煙草も喫まないんだね」

といいます。顔を扇風機のほうへ戻して、

「そう。お酒は両親とも飲めない家系だっていうし」

と教えました。

「楽しみは水泳と、……プロ野球を見ること。東京の野球場は神宮に、それから後楽園？」

「パチンコは」

と母が訊ねたので、すこし面倒になって答えました。

「それくらいするんじゃない」
「賭け事は、どうなんだろう」
バスタオルを使いながらまた母のほうを振りむいた。
「大学生よ」
「この街じゃ学生の麻雀がさかんだっていうから。東京だともっと」
「そんな人じゃないわ」
「誘惑も多いだろうしね」
「そんなこと」バスタオルを使う手に力をこめて「そんなことあたしに聞いたって知らないわよ」
「あきこ……」
と母の声が背中を静かに叩いたような気がした。
「賭け事をする男とだけは一緒になるものじゃないよ」
「一緒にって」
「あたしが言いたいのはそれだけだよ」

「結婚なんて、まだ一言もいってないじゃない」

怒ってみせても結局、無駄でした。母はそれいじょういわず、コップに半分ほどのビールを残したまま寝室へ立っていきました。

二度めに母がそのことばを口にしたのは、わたしが二十二歳の春でした。勤め先の化粧品メーカーと、その顧客である自動車会社の独身社員と合同でおこなわれた花見の席で、二人めの男に出会ったのです。それから一週間後にわたしたちは映画を見て食事をしました。わたしはそれを逐一、母に報告した。母は冬が終るころまで交際がつづいていたはずの高野昭のことにはなにも触れませんでした。もっとも、わたしのほうも彼が大学を卒業したことや東京に職をみつけたことを喋ろうとはしなかったけれど。しかしその代りにこんどもあのことばを、深夜、兄とわたしと三人で夜食（母のおとくいの雑炊）をとっているとき呟いたのです。兄はうす笑いをうかべて沈黙をまもりました。自分じしんへの皮肉まじりと取ったのかもしれません。あるいは父親のことを考えて、その妻とその娘との会話を嘲っていたのかもしれない。わたしは母に、十九のときと同じようなことを言い返しました。母もふたたび口をつぐみました。あたしが言いたいのはそれだけだと。賭け事を

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook